**かぐや　ひめ**

むかしむかしの　おはなしです。  
あるところに、たけとりの　おじいさんと　おばあさんが　いました。  
「おや、ぴかぴか　ひかっている　たけが　あるぞ」

おじいさんは　たけを　きってみました。  
すると、なかには、ちいさな　おんなのこが　すわっていたのです。  
「なんて　かわいいこ　でしょう」  
おばあさんが、びっくりして　さけびます。  
「このこを　つれてかえりましょう」

おんなのこは　かぐやひめ　となづけられました。  
かぐやひめは　すくすく　そだち、  
かがやくほど　うつくしい　むすめに　なりました。

かぐやひめを　ひとめみようと、たくさんの　わかものが　やってきました。  
「ぼくと　けっこんしてください」  
「いやいや、ぜひ　わたしの　つまに」

なかでも　ねっしんなのは、ごにんの　きこうしでした。  
すてきな　おくりものを　さしだします。  
ふわふわした　まっかな　けがわ、  
つるつるの　おちゃわん、  
きらきら　かがやく　しんじゅの　き…。  
どれも　すばらしい　ものでしたが、  
「わたくしは　だれとも　けっこんしません」  
かぐやひめは　みむきも　しませんでした。

それから、さんねんが　たちました。  
ぼんやりとした　きいろの　みかづきのよる、  
かぐやひめが、つきを　みて　ないていました。

おじいさんは　わけを　たずねました。  
「じつは、わたくしは、このよのものでは　ありません。  
つぎの　まんげつの　よる、つきに　かえらなくては　いけないのです」  
かぐやひめは、なみだを　ぽろぽろ　こぼします。  
「おわかれするのが　とても　かなしくて…」  
おばあさんは　かぐやひめを　ぎゅっと　だきしめました。  
「そんなこと　させませんよ」  
「むらの　みんなに　たのんで、たすけてもらおう」

まんげつの　よる、  
かぐやひめの　いえには　むらじゅうのひとが　あつまりました。  
「かぐやひめを　まもるんだ！」  
そのときです。  
そらから、きーんと　するどい　ひかりが　さしてきました。  
まぶしくて、だれも　めをあけて　いられません。

ひかりのなかから　てんにょの　こえが　きこえました。  
「かぐやひめ、おむかえに　まいりました。  
さあ、つきへ　かえりましょう」  
なんて　やさしくて　きれいな　こえでしょう。  
つきの　せかいは、とても　すばらしい　ところに　ちがいありません。  
おじいさんと　おばあさんは　かなしくて　しかたありませんでしたが、  
かぐやひめを　つきへ　かえすことに　しました。

「おじいさん、おばあさん、ありがとう。  
ごおんは　けっして　わすれません」  
かぐやひめは、ひかりにつつまれ、てんたかく　のぼっていきました。

おしまい

**La princesa Kaguya**

Esta es una historia de érase una vez.

Érase una vez un abuelo y una abuela cortadores de bambú.

«¡Oh, hay un bambú brillante!»

El abuelo intentó cortar el bambú.

Dentro, había una niña sentada.

«Qué cosita más mona, ¿verdad?».

La anciana se quedó atónita y gritó.

La niña era una Kaguyahiko (una niña pequeña).

La niña se llamaba Kaguya-hime.

Kaguyahime creció rápidamente y se convirtió en una hermosa muchacha.

Muchos jóvenes vinieron a echar un vistazo a Kaguya-hime.

Por favor, cásate conmigo.

No, no, por favor, cásate conmigo.

Los más entusiastas eran los animales.

Ella le advierte de lo que le espera.

Un barril esponjoso y brillante,

Un cuenco liso y suave,

El nuevo árbol brillante...

Todas ellas eran cosas maravillosas,

Nunca me casaré con nadie.

Kaguya-hime ni siquiera lo miró.

Pasaron tres años.

Tres años han pasado desde entonces, y la noche es una brumosa y dorada medianoche,

la luna brillaba y Kaguya-hime lloraba.

El abuelo le preguntó por qué.

El abuelo le preguntó de qué se trataba.

“Debo volver a la luna a finales del próximo mes”.

Kaguya-hime rompió a llorar.

“Me da tanta pena despedirme...”.

La abuela aprieta fuertemente a Kaguya-hime.

“No te dejaré hacerlo.

'Por favor, pide a la gente del pueblo que te ayude”

Llega el último día del mes,

En la mañana de luna llena, la gente de todo el pueblo se reunió en la casa de Kaguya-hime.

“¡Protejan a Kaguya-hime!”

Fue entonces cuando sucedió.

Una luz brillante y penetrante vino del cielo.

Era tan brillante que nadie podía mantener los ojos abiertos.

Desde el interior de la luz, se oyó la voz de Tennyo.

“La Kaguyahime está en camino para encontrarse contigo.

¡Volvamos a la luna!”

Que voz tan dulce y hermosa.

La luna debe de ser un lugar maravilloso.

Los abuelos se entristecieron al marcharse,

Decidieron enviar a Kaguya-hime lejos, a la Luna

Gracias, Abuelo y Abuela.

Nunca olvidaré vuestras amables palabras.

Kaguya-hime fue bañada en luz y se elevó hacia el cielo.

FIN

むかしむかしの おはなしです。

あしがらやまに げんきな おとこのこが うまれました。

なまえを きんたろうと いいました。

「つよくて やさしいこに なるのですよ」

おかあさんが あかい まえかけと まさかりを くれました。

きんたろうは まいにち まきわりの おてつだいを します。

「いっしょに あそぼう」

うさぎや きつね、しかに りすが きました。

「いいよ」 きんたろうは どうぶつたちと すっかり なかよくなりました。

そこへ とても おおきな くまが やってきました。

「くまどん、しょうぶだ！」

きんたろうと くまは すもうを はじめました。

「はっけよい のこった」

きんたろうも くまも つよくて いっぽも ゆずりません。

「がんばれー」

とうとう きんたろうが くまを えいやっと なげとばしました。

「まいった」

「くまどんも いっしょに あそぼうよ」

おおきな くまも ともだちに なりました。

あるひ、きんたろうは まさかりを かついで くまにのり どうぶつたちと くりひろいへ でかけました。

ところが、こまったことに たにまの はしが こわれて

わたれません。

「ぼくに まかせて」

きんたろうは おおきな きを りょうてで おしました。

ぐぐ、ぐぐ……、どかん！

きが たおれて まるたの はしが できました。

「ありがとう、にっぽんいち つよくて やさしい きんたろう！」

みんなは おおよろこびで はしを わたりました。

そして、おなかいっぱい くりを たべたのでした。

おしまい

KINTARO

Esta es una historia de érase una vez.

En la montaña Ashigara, nació una fuente.

Su nombre era Kinrotaro.

Sería un niño fuerte y gentil.

Su madre le dio una gran capa de pintura y un masaari.

Kintaro te ayudará con tu cabrestante todos los días.

Juguemos juntos».

Vinieron un conejo, un zorro, un ciervo y una ardilla.

Kintaro se llevaba bien con todos los animales.

Luego llegó un oso muy grande.

Kumadon, ¡es un juego!

Kintaro y el oso empezaron a jugar al sumo.

¡Hahkayo no nijo!

Kintaro y el oso eran tan fuertes que no cedían ni un milímetro.

¡Aguanta!

Por fin, Kintaro derriba al oso como una máquina de acero y lo hace volar por los aires con un poderoso lazo.

«¡Oh, no!»

Ven a jugar con nosotros también.

El gran oso también se convirtió en su amigo.

Un día, Kintaro meneó el ancla, se montó en un oso y se fue a las hondonadas con los animales.

Pero, para su desgracia, la brida del gran oso se rompió y no pudo

No pudo cruzar.

Déjamelo a mí».

Kintaro era el responsable de los grandes objetos.

La bola de nieve cayó y Marutama fue golpeado por ella.

El árbol cayó y se formó un poste de Marutta.

«¡Gracias, Kintaro, el hombre más fuerte y amable de Japón!»

Todos cruzaron la escalera con gran alegría.

Y luego se comieron una barriga llena de pepinos.

FIN

むかしむかしの おはなしです。

「あしたは おしょうがつ。

おもちを たべたいですねえ」

おばあさんが いいました。

「たきぎを うって、おもちを かってくるよ」

おじいさんは まちへ でかけて いきました。

おおみそかの まちは おおにぎわいです。

「たきぎは いらんかねー？」

おじいさんの こえは なかなか とどきません。

「やれやれ、こまった」

そこへ、かさうりが やってきました。

「たきぎは うれましたかな？」

「いいえ、ぜんぜん」

「わしもです。どうでしょう、

たきぎと かさを こうかんしませぬか？」

ふたりは とりかえっこを して にっこり ほほえみました。

かえる とちゅうで、ゆきが ふってきました。

「おや、あそこに みえるのは……」

しろい あたまが いち、に、さん、し、ご、ろく。

ゆきを かぶった おじぞうさま でした。

「さむいでしょう。この かさを どうぞ」

おじぞうさまに かさを かぶせます。

ところが かさは 5つ。

おじぞうさまは 6たい。

ひとつ たりません。

「そうだ。わしの ほおかむりを つかってください」

さいごの おじぞうさまには、

じぶんの てぬぐいを かけて あげました。

いえでは おばあさんが しんぱいして いました。

「ぶじで よかったです」

「おもちを かえなくて ごめんね」

「いいんですよ、そんなこと」

おじいさんは きょうの できごとを はなしました。

「それは ほんとうに よいことを しましたねえ」

ふたりは しあわせな きもちで ねむりに つきました。

まよなか、ふしぎな こえが します。

えっさ ほいさ

はこべや はこべ

「だれだろう？」

そうっと とを あけてみました。

そこには、おもちや やさいが どっさり！

はるか むこうに かさが 5つ みえます。

「あれは、おじぞうさま！」

いちばん うしろを あるくのは、

てぬぐいを かぶった おじぞうさま でした。

「なんて ありがたい」

ふたりは ふかく かんしゃ しました。

そうして いつまでも しあわせに くらしましたとさ。

おしまい

KASAJIZO　(Los sombreros de Paja)

Esta es una historia de érase una vez.

Mañana es año nuevo

Abuela: Me gustaría probar los pasteles de arroz.

Abuela: Saldré a leña y traeré pasteles de arroz.

El abuelo salió al pueblo.

El pueblo está muy animado en Nochevieja.

«¿No quieres leña?»

La voz del abuelo era difícil de oír.

Abuelo: «Oh, rayos, no he vendido nada».

Entonces, apareció un vendedor

Vendedor: «¿Has vendido leña?»

Abuelo: No, para nada.

Vendedor: Yo tampoco. No sé, no sé,

¿Te gustaría intercambiar la leña por los bulbos?

Los dos hombres intercambiaron sonrisas mientras probaban suerte.

Los dos hombres intercambiaron unas palabras y sonrieron.

Abuelo: «Oh, ahí están... ......».

Los monjes de piedra con la cubiertos de nieve, es uno, dos, tres, cuatro, cinco, seis.

Debe de hacer frío. Por favor, Toma este sombrero.

Le pone uno a uno el sombrero

Abuelo: «Debe hacer frío. (pone el sombrero)

Abuelo: «Debe de hacer frío.

Eran seis monjes de piedra, pero solo tenía 5 sombreros

En la casa, la abuela estaba preocupada.

Abuela: Me alegro de que estés bien».

Abuelo: Siento no haber traído mochis

Abuela: Está bien. No importa.

El abuelo le contó lo que había pasado hoy.

Los dos se durmieron con una sensación de felicidad.

En mitad de la noche, oyeron un ruido extraño.

¡Hee-hee-hee!

¿Quién es?»

Abrí rápidamente la puerta.

¡Había un montón de pasteles de arroz y verduras!

Más allá se veían seis sombras

¡Eran los monjes de piedra!

¿Caminan en linea?

El que camina hasta atrás era el monje, que lleva la pañoleta que le regalo el abuelo.

¡Menos mal!

Los dos estaban profundamente conmovidos y agradecidos.

Vivieron felices para siempre.

FIN

**雪女　ゆきおんな**

これは　世にも　ふしぎな　おはなしです。  
むかし、ある村に　年老いた木こりの もさく と、わかい木こりの みのきち がおりました。

あるばん、山からかえる とちゅう、びゅうびゅうと　雪が　ふきあれていたので　  
ふたりは　山ごやで　よるを　すごしました。

まよなか　みのきちは　目を　さましました。  
こやは　しんしんと　ひえています。  
「ひどく　さむいな」  
ふと　見ると　足もとに　ひとりの　女が　立っていました。  
まっ白の　きものに　長い　くろかみの　ぶきみなほど　きれいな　人です。  
女は　ねむっている もさくに　近づき、ふっと　いきを　ふきかけました。  
すると　もさくの　かおは　青ざめ、見るまに　つめたくなって　しまいました。

「雪女だ」  
みのきちは　おそろしくて　ぶるぶる　ふるえました。  
女は　ゆっくりと　近づいてきます。  
「もう　だめだ」  
けれども、女は　しずかに　言いました。  
「おまえは　わかいから　たすけてあげる。  
このことを決してだれにも　話してはいけないよ。  
もしも　だれかに　話したら　ころしに　行くからね」

よくあさ、もさくは　しんでいました。  
みのきちは　ひみつを　かかえて　家に　帰りました。

一年ごの　冬。  
みのきちの　家に　ひとりの　むすめが　やってきました。  
「ふぶきで　こまっています。どうか　とめて　ください」  
むすめの　はだは　すきとおるように　白く、  
くろかみは　つややかで　たいへん　うつくしい　人でした。  
名まえは　お雪といいました。

みのきちと　お雪は　ひと目で　こいに　おちました。  
ふたりは　けっこんして　しあわせに　くらしました。  
それから　なん年も　たちました。

ふたりの　あいだには　はだの　白い　子どもが　たくさん　うまれました。  
けれども、ふしぎなことに　お雪は　けっして　としを　とらず  
いつまでも　若い　ままでした。

こんやは　ひどい　ふぶき　です。  
「まるで　あの日の　ようだ」  
みのきちは　雪女の　ことを　思い出しました。

「あなた、どうしたの？」  
お雪が　たずねて　きました。  
みのきちは　すなおに　はなしました。

「ずっと　むかし　今日みたいな　ふぶきの　ばん、雪女と　あったんだ」  
そのとたん　お雪の　目が　つりあがり、おそろしい　かおに　なりました。

「だれにも　はなしては　いけないと　言ったのに」  
なんと　お雪は　あの日の　雪女　だったのです。  
お雪は　みのきちを　にらみつけて　言いました。

「いますぐ　ころして　やりたいが　子どもたちが　いる。  
　いいね、子どもたちを　だいじに　しなさい。  
　さもなければ　かならず　ころしに　くるからね」

つめたい　かぜが　びゅうっと　ふきました。  
お雪は　白い　こおりの　つぶに　なり　きえて　しまいました。

La mujer de las Nieves

Esta es una historia magica

Érase una vez, en un pueblo, un viejo leñador, Mosaku, y un joven leñador, Minokichi.

Un día, cuando volvían de la montaña, hubo una fuerte tormenta de nieve.

Pasaron la noche en la ladera de la montaña.

En mitad de la noche, Minokichi se despertó.

El refugio estaba helado.

Samuel: «Hace mucho frío».

De repente, vi a una mujer de pie a mis pies.

Es una mujer preciosa con un kimono blanco y el pelo largo y negro.

El primero es el «Mosaku», que es el nombre que recibe el rostro de una mujer.

La primera cosa que me viene a la mente es el hecho de que la primera vez que ves a una persona en el mundo, es probable que la veas de la misma forma que la ves en la calle.

La primera vez que se mostró el juego fue en 1966, cuando se proyectó en la primera mitad del año.

Lo primero que hay que hacer es asegurarse de que se tiene una buena idea de lo que se busca.

Lo primero que hay que hacer es asegurarse de que te lo pasas bien.

Ya no puedo hacerlo.

Pero ella dijo con calma: «Eres demasiado débil para salvarte.

Eres un hombre joven, así que te ayudaré.

Eres un hombre sabio, así que te ayudaré.

Si se lo cuentas a alguien, te ahuyentaré.

Asa Mosaku estaba a menudo en la cama por la noche.

Minokichi volvió a casa con un secreto.

Un año después, en invierno, Minokichi se reúne en casa solo.

Un invierno, una chica vino a casa de Minokichi.

Estaba preocupada por una tormenta de nieve. Por favor, para».

El cuerpo de la chica era claro y blanco,

Su pelo negro era brillante y era muy hermosa.

Su nombre era Oyuki.

Minokichi y Oyuki se enamoraron a primera vista.

Se casaron y vivieron felices para siempre.

Pasaron muchos años desde entonces.

Les nacieron muchos niños con cuerpos blancos.

Pero, por extraño que parezca, Blanca nunca perdió su juventud.

Siempre fue joven.

Esta noche hay una terrible ventisca.

Es igual que aquel día.

Minokichi recordó a la Mujer de las Nieves.

¿Qué te pasa?

preguntó Oyuki.

Minokichi habló con franqueza.

Érase una vez, hace mucho tiempo, en una noche de ventisca como hoy, conocí a la Mujer de las Nieves.

La primera vez que la veas, verás a una mujer con una gran sonrisa en la cara.

La primera vez, los ojos de la Mujer de las Nieves se volvieron asustadizos y su rostro, aterrador.

Oyuki era la Mujer de las Nieves de aquel día.

Oyuki miró fijamente a Minokichi y le dijo: «Quiero hacerte rodar ahora mismo.

Me gustaría echarte ahora mismo, pero tengo hijos de los que ocuparme.

Me gustaría echarte de casa ahora mismo, pero tengo hijos.

Cuídalos o tendré que venir a echarte.

Sopló un viento frío.

La nieve se convirtió en una nube de polvo blanco y desapareció.

FIN